

社
會

峰



9.10.11.12月号

第3卷 第7号

通卷 第25号

鷲峰目次

九と十二合併号

卷頭の言葉

末法の修行は人間礼拝

4

心・靈と精靈（その二）
この恐るべき靈的現象の事実

沢田覚象

6

人道と水車

宮本龍一

25

映画「偉大な生涯の物語」をみて
アリアの母性愛に想う

中山玲子

28

関西・中京地区

身延山街頭布教紀行

編集部

36

京都地区	大阪地区	尼ヶ崎地区
名古屋地区	瀬戸地区	小牧地区
一ノ宮地区	57 53 37	58 55 42
	津島地区	沖之島地区
	59 56 50	

短
歌

西 沢 緣

本誌合併号の事由とその誌代について

新春 正月・三月街頭布教予告
 新春二月福岡県下街頭布教予告
 編 集 後 記

64 61 27 62 35

表紙題字……身延山法主藤井日静猊下
 表紙写真……インド靈鷲山へ渡つた身延山金銅の釈尊像
 表紙印刷……大阪東洋印刷社長藤原秀憲氏寄進
 カット……みのぶ教報提供

人間禮拝は

お題目修行の中でも断食をしたり、寒中に水をかぶつたり、滝にうたれたり、或はローソクや線香の火で体を焼いたり……常識では考えられないような超人的な修行が、最も至難な行として尊ばれている傾向があります。

然し、それらの肉体的な苦行よりも、更に至難な、そして最も尊い修行は何であるかと云ふと、それは何といつても、老若男女、貧富貴賤、敵も味方も、如何なる階級も人種も越えて、すべての人々を平等に尊重し、心で尊重するばかりでなく、手をあわせ頭をさげて合掌礼拝するという人間礼拝の修行です。分けても、自分の悪口をいう人々や、自分を墮し入れようとする人々、或は直接暴力をふるう人々に対してさえも、その敵を礼拝するのみならず、その人の背後の靈に対するまでも回向供養するということです。

日蓮大聖人一代六十一年の御化導は、実に此の人間礼拝に徹して行かれたことでした。それは法経第二十章に示された常不輕菩薩の但行礼拝を基範とするものでした。常不輕菩薩は、罵詈打擲するすべての人々をも三世を通して礼拝し通しました。大聖人もまた、大難四ヶ度、小難数知れずという迫害を加えた鎌倉幕府をはじめ天

末法の修行

下に充満する法敵のすべての人々に対しても、

「彼等こそ、私の無始の罪障を消滅してくれる恩人である」と、うらむどころか、むしろ感謝し、感謝するばかりでなく、法敵のその罪をも、みずから一身に背負つて、仏天に懺悔し抜かれたのです。

私たちの周辺には、味方ばかりいるとは限りません。むしろ味方よりも、自分を傷つける人々や、墮し入れる人々が、何と多いことでしょう。これが末法濁惡の世の実態なのです。然し、そうゆう憎むべき人々に対してでも、むしろ感謝し、人間礼拝に徹して行くところに、いな、そのように努力して行くところに、眞の法華經信仰の実践があると申せましょ。

親が子を、子が親を、そして夫婦同志が兄弟同志が、互に三世を通して敬いあい合掌礼拝しあうならば、その家庭こそ眞の寂光の宝刹であり、家庭成仏の光は、その家人ならず、おのずから近隣にも及ぼし、引いては國家、世界全体にまでも及ぼして行くことでしょう。末法における最高の行、それは人間礼拝に徹することです。

心と精神と霊へその二一

この恐るべき靈的現証の事実

沢田覚象

前号では大野富士夫さんが、過

去二十数年来、悩みに悩み、千回

以上手術しても、なおらなかつた

不治の病いとも、業病ともいわれ

そうな兩足の（それも化物のよう

になつた足裏の）水虫が、ただ一

回の施餓鬼供養によつて、奇蹟的

にも、すつかりよくなつたという

実例を紹介してみました。

それは死靈（精靈）供養の功德

によるものであつたのですが、今

度は、人間の一念の恐ろしさ、そ

れは一般には、心靈とも生靈（い

きりよう）とも言われている種類

のものなのですが、その生靈の執

念の恐ろしさというもの、同じ

く大野さんの体験を素材にして、紹介してみるといたしました。

これは、実は大野さんが、一家

をあげて法華經に改宗する動機と

もなつたほどのものであると同時に、大野さんの勤務先きの人事の

大移動まで起し、引いては、これ

に関連した人々の家庭の上にまで
も「遠着於本人」の現証を、如実
にあらわした戦慄すべき実例な
です。

4

昭和三十五年十一月二十七日の
ことでした。大野さんは突然、得
体の知れない病気にかゝつてしま
いました。病名は脳腫瘍か縫内障か
いうことでしたが、それも、はつ
きりとしたものではありませんで
した。然し、いずれにしても大変
な病気です。

大野さんは即刻、京都府下、綾
部市の病院に入院しました。然し
病状は少しも好転せず、じりく

と悪化の一途をたどるばかりで、

入院以来、はやくも四十日が過ぎ
てしまいました。

医者も手のほどこしようがなく
サジをなげたような有様なので、
これ以上入院していても仕様がな
く、一時退院して、自家養生する
ことにしました。

然し、自家養生とはいっても、
医者に手放された今となつては、
するところは宗教以外に何のあ
りません。

「苦しい時の神だのみ」

定石どおり、大野さんの奥さん
(三枝さんというのですが) 三枝
さんは、近郊近在の名だたる祈祷
師にすがつては、盛んに加持祈禱
をしてもらいました。

へ宗教は何でもいい。仏教でも神
道でもいい、得体の知れない神さ
まであつてもいい。ただ夫の病気
をおおしてくれるのなら、私は、

どんな風をかけても、祈りたい。
自分の寿命をちぢめてでも、祈り
たい。

というのが、当時の三枝さんの
しん底の気持でした。

然し、ワラをもつかむような思
いで頼つたはずの、いずれの祈祷
師の修法も、何の効果はなく、大
野さんは全く骨と皮にやせ細り、
深くくばんだ眼窩の奥には、目ば
かりが異様にギラ／＼光っている
ばかりでした。

当時、夫婦の間には、三人の子供がいました。長男の正行（まさつら）君は、まだ小学校の五年生長女の富恵ちゃんは四年生、そして次男の隆章（たかあき）ちゃんは、やつと一年生になつたばかりでした。

いたいけなき三人の子供をかえ、医者にも祈祷師にも見捨てられた病める夫を前にして、三枝さんは、もはや自分の力で、神仏にすがるほかはありませんでした。

もしいから、夫を元の体にして下さい

ら、御慈悲です、どうか私たち一家を、お救い下さい』

三枝さんは家の内で、四方八方に向つて、何処にいるとも知れない、名前さえ判らない神々に対し

て、頭をタタミにすりつけて頼みつけました。

幾度も幾度も、そうする中、三枝さんの額は、タタミにそれで赤く腫れ上つていました。

「三光不動さまにお願いしたら」

という、近所の人の教えに頼つて、そこへお百度を踏みに行きました。

然し、大野さんの病氣は、日一

大野さんの家には先祖代々伝わった日本刀が二振りありました。

もとより戦後登録されていたものですが、その日本刀を、

「護り刀だ」

といつて枕もとにおき、やにわに抜き放つて、割腹自決しようとしたことも、再三のことではありませんでした。

に、フランクと起きあがつては、幽鬼のように、外を出あるこうとさえする始末でした。

5

した。すると、

△これが半死半生の病人なのか△
と驚くほどの力で、暴れまわる
始末です。

△よくなる見込みもない、こんな
病気の体で、何時までも、生き恥
をさらして、妻子に迷惑をかける
よりは、いつそのこと、死んでし
まいたい△

と大野さんは、そのことばかり
を思いつめていながらも、いざぞ
よく日本武士道の作法通り、見事
割腹自決しようとしても、日本刀
をかくされてしつまた今となつて
は、鉄道自殺、首つり、入水のほ
かはなく、夜半、三枝さんが看病
の疲れで、ぐつすり、寝込んでい

る隙をみては、そつと家を抜け出

し、福知山線の鉄道線路に、死に
場所を求めて、彷徨することが二
度もありました。一度は、裏山の

八幡神社の境内で、首をつるうと
したこともありました。

然し、如何に夢遊病者の如くな
つていたとはいえ、

△いざ、ここで死のう△
という段になると、さすがに妻
の顔、三人の子供の顔が瞼にちら
つき、ふつと躊躇した心には、
△社会の風紀を取締るべき公務員
とあらう者が、こんな死に方をし
ては……△

という反省も起きて来て、一晩

中、適当な死に場所も、死に方も

見出されないまま、つい夜が明け
てしまい、家族の者や近所の人々
に見つけ出されて、家につれもど
さるという有様でした。

義理のよう往診に来ていた医
者は、

「自律神経症」

△という病名をつけていましたが
その中、何回か心臓が止つてしま
うということがありました。

ところが、その都度、急報によ
つて親戚中の人々が駆けつけて来
ると、また心臓が動き出し、

△骨をひろつてくれつ△

と、うわごとを、わめき散らす
始末です。

自殺も出来ず、自然死も出来ず

文字通り死ぬにも死に切れない大野さんは、さながら生ける魔のよな状態であつたのでした。

6

昭和三十六年二月、大野さんはやせ細つた震える手で、辞表を書きました。

それは、死ぬにも死に切れなかつた身であればこそ、死ぬことの出来る体制を、あえて整えようとしたことでもあつたでしよう。

然し、辞表は受理されませんでした。そして死の辞表は、そのままストーブの火の中にくべられてしまつたのです。

勤務先きの所長は、日頃から部

下に対しても、思いやりの深い、責任感も強い人でした。

「半年でも一年でも、充分養生して、すっかり、よくなつてから出て来るようだ……」

というのが所長の、情けある言葉でした。

然し、死ぬにも死にきれず、辞めるにも辞められなかつた大野さんの心中は、いかばかりであつたことでしよう。

それは、さながら呪いに呪われた者の、のたうつような姿でしかありませんでした。

とうとう見るに見かねた三枝さんの実家から、

「病人は精神病院へ入院させるがよい。三枝は三人の子供をつれて里へ帰つて来るがよい。このまゝでは共倒れになるほかはない」と言われる時が来ました。

然し、この時です。三枝さんは

的な狂乱状態を起すようになります。狂乱は時と共に、ますますひどくなるばかりでした。

△死にたい、死にたい。一刻も早く死なさせてくれ▽

「苦しんでいる夫を、見放すこと
は出来ません。医者にも祈祷師に
も見放された夫の身になれば、ど
うして見殺しにすることが出来ま
しょう。

私は夫から離れることは出来ま
せん。どんなことがあっても、夫

のそばにあります。そして、最後
の救いが、きつとくおとずれる
ことを、私は信じます」

あゝ何という切ない情愛でしょ
う。何と尊い言葉でしょう。三枝
さんは、つき落された苦しみのド
ン底にあつても、この苦しみを避
けず、真向から苦しみと取り組

み、すべての人々が既に見放し、

自分自身の力でさえも、今までに
尽き果てようとしている時にあつ
てさえ、ただひたぶるな情愛から

何時、何処からおとづれるとも計
り難い「最後の救い——神仏の大
慈悲」というものを、確信してい
たのです。

「いな、そう確信せずにはおれな
かつたのが三枝さんの、ギリく
の生き方であり、情愛でもあつた
のでした。

然し、この情愛こそが、遂に最
後の勝利をもたらすに至つたので
す。

七年三月十五日の日のことでした
知り合いの磯井さんという方の
お母さんが、福知山の鬼子母神堂
へお参りに行く、ということを聞
いて三枝さんは、

「どうか私も、つれて行つて下さ
い」

と頼みました。

然し、こうした頼みは、これま
でに何十回と繰り返されたことで
しよう。その度ごとに失望して來
たはずの三枝さんではありました
が、

「教わるところは、ただ神仏の
ほかはない」

して、どう出ようとも一楼の望み

をかけて、そう願わすにはおられ

なかつたのです。

それは終戦後、ソ連抑留者を乗せた引揚船が、舞鶴港へ入るたび

ごとに出迎えに行き、最後の引揚

船が立ち去つた後までも、なおふ

頭に立たずんで、荒れすさま日本

海の、水平線の彼方をみつめなが

ら、我が子の帰りを待ちわびる、

母親の心にも通じるものがあつた

ことでしょう。

この日、三枝さんが、つれられて行つた福知山の鬼子母神堂……

それは、実は私の母の道場であつたのですが、ここで三枝さんは

私の母から思いもかけない、恐る

べき」とを聞かれたのです。

「あなたの御主人の神経は、今に

も切れそうな、糸のように細くな

つている。これは、もとをたゞせば四人の生靈にやられているからです」

四人の生靈……三枝さんは

そうと聞いて、恐ろしさに全身縮

毛立つ思いをしました。

「その四人とは、一体、誰と誰な

のですか？」

三枝さんは、そう尋ねずにはお

れませんでした。私の母は答えました。

「三枝さんは、そう尋ねずにはお

れませんでした。私の母は答えま

すをのんで、聞き入りました。

「その四人とは？」

に怨み返さずには、おられなくな

るからです。

「然し……これだけは教えてお

きましょう。その四人とは……」

三枝さんは目も血走らせ、かた

「その四人とは？」

「その四人とは、あなたの御主人

の同なのです」

「主人の同僚？……」

「そうです。そのように御主人に

伝えれば、御主人の心に、思い当

るふしもありましょう。若し、思

い当らなければ、それでもよいの

です。要は一刻も早く、その生靈

の呪縛からのがれることが先決な

のですから」

三枝さんは今や必死でした。必

死の思いで、生靈の呪縛より離れ

る方法をたずねました。母は答え

ました。

「願をかけなさい」

「どういう願でしようか?」

「三七・二十一日の間、日参する

ことです。」

「こゝに日参すれば、よろしいの

ですか?」

母は静かにかぶりをふりました

「一体、何処なのですか?」

「あなたの家の近くに、妙見さん
をお祭りしているお社があるはず

です。そこに願をかけて、日参す

ればよろしいでしよう」

三枝さんは、いそいで家へ走り

帰りました。そして血眼になつて

近郷近在に、妙見大菩薩を勧請し

ているお社をたずねて走きました

ほどもなく石原(いさ)という

町はそれに「石原の妙見さん」と
いって祭られているお社をたずね
当てることが出来ました。

三枝さんは、さつそく翌の三月

十六日の早朝より、二十一日間の

願をかけて、日参し始めました。

「どうか夫の病いをなおして下さ
い。夫の体にかけられている因縁
の呪い縛をほどいて下さい」

もとく曹洞宗の檀家であつた

三枝さんが、法華經のお經を知ろ

うはずはありません。私の母に教

えられたまゝ、無我夢中で、

「南無妙法蓮華經 」
と、声を限りにお題目ばかりを
唱え続けました。

春とはいえ、山陰の丹波地方の

三月は、まだ真冬のような寒さで

した。山々は白雪におゝわれてい

ました。三枝さんは寒風をつき、

吹雪をついて日参しつづけたので

す。

それは、日参し始めてから一週

間日の日のことでした。何時もの

よう日に参に出かけようとする

「おれも行きたい。是が非でも、

つれていつてくれ」

と大野さんは自身から言い出した

のです。

三枝さんは、びっくりしてしま

いました。夫が自分と一緒になつて折つてくれるということは、確かに嬉しいはずですが、然し三枝さんには、消え入らんばかりにやせ細つた夫、歩くことさえもおぼつかないくらいに衰えた夫が石原の山の中の妙見さんのお社へお参りすること自体、それこそ命がけのことにして思われなかつたからです。

三枝さんは再三、同行を思い止めようとした。然し、一旦言い出した大野さんは、

「そこで、死んでもいいから、つれて行つてくれ」

と言い張つてきしません。

やむなく三枝さんは、こわれも

のを抱くようにして、大野さんの手を引きながら、妙見さんのお社へとつれて行きました。

もとより衰弱し切つた病人ですから、思うように歩くことは出来ません。半歩ずつ暫く歩るいては休み、休んではまた暫く歩いて、やつと境内にたどりつくことが出来ました。

その時のことです。大野さんは何を感じたのか、突然、歩くことも忘れたように、たゞ茫然と立ちすくんでしまいました。

それは判りません。おそらく本人才も判らなかつたことでしよう。然し二人は、確かに何ものかを感じたのです。

大野さんの両頬は、とゞめもなく溢れる涙にぬれていきました。

「あなた」

と、夫にすがりつく三枝さんの両眼にも、どつと涙があふれました。二人は暫し、境内に立たずんだまゝ嗚咽していました。

△大野さんが何を感じたのか△
△三枝さんが何を感じたのか△

心にうつ何ものかを、魂に響く何ものかを感じたればこそ、止めどもなく溢れる涙に、両頬が洗われて行つたのです。いうなれば、

△正法の光りなき光にふれた△と
でもいうのでしよう。

爾来、大野さんの病気は、さな
がら一枚ずつ紙をはがすように、
よくなつて行ました。

日参の二週間目の日、再び大野
さんが、

「今度もつれて行つてくれ」

と言いました。もう大野さ

んは、以前よりも、ずっと元気に
なつていました。明るい大野さん

でした。死神から遠ざかつた大野

さんでした。二人は手をとりあつ

て石原（いさ）の妙見さんにお参

りに行きました。

そして満願の三週間目の朝、大

野さんはお勤めに出かけたのです

これは驚異的というか奇蹟的な回
復でした。まさしく私の母の言つ
た通りでした。日参三週間にして
立派に健康を回復したのです。

それは母の予言というよりも、
むしろ三枝さんが、最後にすがつ
たお題日の、信仰の功德といわれ
るものであります。

既に、勤め先に於ける、大野さ
んの同僚四名の上には、大きな禍
いが起きました。

Aは、五〇〇〇のカブに乗つて
いて、カブもろとも自動車にはね
られ、一ヶ月も入院していました

Bは急性胸部疾患のため入院し

片肺の助骨を何本も切り取つて、
まだ退院も出来ずにいました。

Cの妻は、原因不明の病気のた
め開腹手術し、Dの父もまた、原

因不明の病気で中風状態となり、
この人は間もなく死亡してしまいました。

いうまでもなくABCのこの

という責任を、みずから取つた
ものでした。

既に、勤め先に於ける、大野さ
んの同僚四名の上には、大きな禍
いが起きました。

ABCのこの

四名の同僚こそ、大野さんに対し

て怨みを懷き、怨みが、いわゆる

生靈となつて、大野さんを狂死の

す前にまで追い込んでいたのです。

それは、まことに、さういなサ

カウラミから起つたことでした。

曾つて大野さんが、外勤から会

社へ帰つて来た時、文代に出て行

つた同僚の一人が、制服から私服

に着替える際、机の上に取り出し

た手帳——それは、この種の公務

員としては、命よりも大切だとさ

れた手帳なのですが——それを、

つい机の上に置き忘れたまゝ、外

勤へ出て行つたのです。

それを、後で気付いた大野さん

つておく余裕もなかつたゝめ、
「これを、あずかつておいて下さ
い」

と上司へ渡し、自分は直ちに次
の仕事にかゝつたのでした。

ところが、その同僚は、

△勤務上、命より大切な手帳を、

つい忘れてしまつた、という落度

があつたとはいうものの、それを

得たり賣しとばかり餌にして、大

野の奴が上司へ告げ口をした。そ

してオレを落し入れようとしたん

だ

と曲解してしまつたのです。

これには大野さんが、勤務上、

抜群の成績であつたということに

対する、日頃のソネミのあつた、

めであるということとは、いなめな
いことでもあります。

日頃のソネミは彼だけでなく
他の三名にもありました。たまた
まこの四人は、日頃から気もあつ
た仲の良い友達でもありました。

手帳の一件以来、四名は折にふ
れては秘かに落ち合い、日々に大

野さんを怨み、憎しみ、そしての
ゝしりました。手帳を置き忘れた

一人が、

「おれは、もう首になるかも知れ
ぬ。首にならなくとも左遷される

かも知れぬ」

と危惧すれば、他の三人が彼を

励まし、励ます勢いは、おのずか

ら大野さんに対する、激しい圧迫

罵倒の声となつて行つたのです。

蓋し、こうしたことは勤め人の

根性として、よくあることでしょ

うが、職場におけるこの一件は、

それとも四人の家庭における話題

ともなり、家族の者も主人の口裏

に合わせて、大野さんをうらんだ

り、のゝしつたりしたのです。

こうして、四人の怨みや憎しみ

というものが、何時の間にか、呪

いの生靈となつて、大野さんの体

を侵し、神經を侵して行つて、遂

には幾度かの自殺未遂へと追いや

つて行つたのも、但し必然的な成

然し、三枝さんが、ひとたび顎

を立てゝ一心に妙見さんに日参し

始め、

「因縁の呪縛が、一日も早くとけ
ますように……」

と、お題目をもつて祈つた時、

たとえそれが、初めて唱えるお題

目であつたとしても、或は唱える

本人に、法華経に対する何らの理

解すらなかつたにしても、法華経

の力と、本人の真剣さによつて、

法華経第二十五章の觀世音菩薩普

品門の偈の中に、

呪詛諸毒薬 所欲害身者

念彼觀音力 還著於本人

呪詛もろゝの毒薬に

身を害せんと欲せられん者

彼の觀音の力を念ぜば

還つて本人につきなん

と明示されている通り、四人の

生靈は、大野さんの体より離れて

却つて本人に還着するのみならず

口裏をあわせて大野さんをのゝし

つていた家族の者にも還着して家

族もろとも、大野さんが苦しむ以

上の苦しみを受けねばならなかつ

たのでした。

然し、この四人の同僚が、大野

さんの病気を聞いて、たとえ、

へいゝきびだ△

と思つたことがあつたとしても

まさか自分たちの怨みや憎しみと

いつたものが、生靈となつて禍い

していたとは、夢にも氣付かなかつたことでしょう。

そして、それと氣付いた時には

既に四人の同僚の上にも、その家族の者の中にも、大野さんを怨んだすべての人々の上に、「還著於本人」の恐るべき現証が、テキ面に、しかも同時に現われていたのです。

俗に、

「人をのろえは穴二つ」

という諺もありますが、まさしくその諺の通りになつたのです。

いな、こうした結果が現われた

ことによつて、はじめて自分たち

が、人を怨んだ罪の恐ろしさとい

うものを、痛切に思い知らされた

のでした。

大野さん自身としては、たとえ人に怨まれ、憎しまれ、或はのゝ

自分を怨んだ人々こそ、却つて哀れに思われ、急性胸部疾患のため

わりました。

妄執の恐しさというものを、身にしみて痛感すると共に、法華經信仰の現証のあらたかさを、しみじみと思わずにはおられなかつたこ

とでしよう。

そして法華經の尊さを痛感すればするほど、怨みに報ゆるに怨みをもつてするのではなく、むしろ

私が心も安まります」

然し大野さんは、やさしくいた

しられたとしても、自分からは怨み返したり、或はのゝしり返したりすることではなく、またその気にもなれなかつたことでしょうが、ことが、自分自身の体の上に体験せしめられた瀕死の苦しみであつただけに、人間の一念の恐しさ、

「私が悪かつた。許して下さい。貴方の好意を曲解して、怨んでばかりいた私は、本当に罰あたりでした。

どうか貴方の気のはれるまで、思う存分、私をのゝしつて下さい。擲つて下さい。そして頂ければ、私の心も安まります」

「貴方を怨み返えそらうなんて、夢にも思つておりません。私は、今度の病氣のおかげで、尊い法華經信仰にめぐりあえることが出来たのです。

若し、今度のことがなければ、到底、法華經にめぐりあうことすら出来なかつたことでしょう。

そう思うと、怨み返すどころかむしろお札を申上げねばなりません。
どうか一日も早く、元氣になつて下さい。そしてまた一緒に働きましよう」

大野さんは、仇に報ゆるに恩をもつてしましました。いな、いろわづつくろわづ、おのずから、そうす

ることの出来る法華經信仰に入つていたのです。則ち法華經信仰の功徳によつて、仇に報ゆるに恩をもつてすることが出来たのでした

然し、職員も数少ない勤務先き（そこは出張所とでも、分所とでも言つてよい所ですが）その職場も言つてよい所ですが）その職場における四人の職員、大野さんを加えれば五人の職員と、その家族の上に、一家崩壊するような出来事が、あいついで発生した根本と

いうものが、実は一冊の公務員手帳に起因していたということから遂に上可の責任問題とまで波及し翌る昭和三十七年四月一日の年度変りを契機として、所長はみずから辞職し、課長も次長も、みずか

ら転勤して行く結果ともなつたのでした。

曾つて大野さんが病氣の最中、辞職願いを出した時、その辞表をそのまま握りつぶした温情厚き所長が、みずから辞職して行かねばならなかつたという結末は、誠に皮肉というか、気の毒なぎわみではあります。蓋し、こうしたことは、まことの法華經信仰の内にたとえ一人でも入る時、その周辺には、法華經第十一章の見宝塔品における、三寶土田のような大瑞が起るという、その一斑を示すものであります。

以上が、大野富士夫さんの法華經入信の動機を物語つた概要です
が、まことに人間の一念ほど恐しいものはありません。

執念、妄執といえば無氣味にも感ぜられますが、この物語の中に出て来る四人の同僚の一念は、それほど重苦しいのではなく、
△あの野郎！△
△この畜生！△
△にいい奴だ！△
といった程度のものでしかなかつたのです。それは、私たちでも常に経験する日常茶飯事の、ありふれたものでしかなかつたことでしょう。

ところが、この憎しみの心、怨

みの心というものが、一念、生靈という形となつて、大野さんに対しして瀕死の禍いを与え、これがひどたび還著するや、本人をはじめその家族の人々の上にも、取り返しもつかない死の禍いをひき起してしまつたのですから、たとえ、かりそめの心であつてさえも、人間の心の置きどころほど、恐しいものはない、と申せましょう。

へたとえ、かりそめにも蔭口を言つてもならない、

という反省の資料ともなりました。

10

中国の天台大師といふ高僧が、次のように申されました。
「人間の刹那の心（一念）にさえ既に三千の世界がある」と。このことは仏教々学上、通常「一念三千の法門」といわれ、特に日蓮大聖人は、この法門にもとづいて「事の一念三千」を主張されたのですが、その構成の概略を述べれば、次のようになります

「人間の刹那の心（一念）の中に

も、既に地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上・声聞・縁覚・菩薩・仏という十界があり、その十界は互に円融互具しあつて百界を形成し、更に百界それらの一念は、相・性・体・力・作・因・縁・果・報そして本末究竟等という十種の内容（通常十如といふ）をもつて、有機的に活動している。

こゝに十界互具・百界千如の世界が形成されるわけであるが、この心は、衆生世間と国土世間と五蔭（ごおん）世間という三つの世間をよりどころとしているところから、三千の世界が構成され、人間一念心の中に、三千の世界がある、ということが出来る」

人間・天上・声聞・縁覚・菩薩・

佛という十界は

ところで、こゝにいう三世間の中の五世蔭間というのは、一説には、

「衆生世間と国土世間とを総括して、物心一如の基範を示すものである」

とも言われていますが、またの説には、

「それは原子・微粒子の世界である」

とも申されています。

私は、五蔭世間なるものを、観念的にといふよりも、むしろ存在するものとしてとらえ、原子・微粒子の世界という後者の説により

何故ならば、そうすることによ

つて、神仏の実在、生靈・死靈といふ靈的生存をも、認めることができます。

現代物理学においては、波動説とか粒子説とか、唱えられているそうですが、今これを仏教の五蔭世間に当てはめてみる場合、そのいすれであつてもよいと思います。仮に、五蔭世間を微粒子的存在であるとするならば、一利那の人間の心は、微粒子的核として十界互具しながら、地獄は地獄の、餓鬼は餓鬼の、相・性・体・力・作・因・縁・果・報として、自他ともに波及して行くのです。

たとえば人を怨んだ一念は、たとえ本人が既に、怨んだことさえ

忘れてはいても、その一念は消滅しない限り、核として生きて活動しつゝけているのです。

俗に、

「生き死靈（いきしりよう）ほど

こわいものはない」

と申されていますが、生き死靈とは、生前の怨みをもつたまゝ死んだ人の一念のことです。

「臨終正念」

という言葉もありますが、生きていた時も怨みつゝけ、臨終のまぎわにも忘れず、なお死んだ後までも怨みつゝける人間の一念といふものは、執念として考えてみても、まこと恐しいものでしよう。

話しさは横へそれましたか、人間

の一念心に十界があり、十界互具

しつゝ十如を具して、これが核として生きているということは、そのまま仏界においても同様に言えます。

日蓮大聖人は観心本尊妙の中で
釈尊の因行果徳の二法は

妙法蓮華經の五字に具足す

と明示されていますが、まさしく

妙法蓮華經のお題目が、久遠の

本體無窮の、無始無終なる因果の

功德そのものであるならば、そ

うお題目は、もはや観念的なもので

もなく、哲學的なものでもなく、

妙法蓮華經は

文字にあらず

たゞ一部の心のみ

という大聖人のお言葉通り、一部八巻二十八品の法華經々典に顯現された本仏釈尊の、心そのものゝ波動、乃至は粒子的存在として

毎自作是念 以何令衆生

得入無上道 速成就仏身

つねにみづからこの念をなす

何をもつてか衆生をして

無上道に入り

速かに仏身を

成就することを得せしめん

という、みづからの大悲願のま

にまに、たゆまない無限の活動を

つゝけている、と申せましよう。

三界は安きことなし

万民乱る

なお火宅の如し

衆苦充满して

甚だ怖畏すべし

常に生老病死の憂患あり

かくの如きらの火

熾然としてやまず

とは、法華經の第三章、譬喻品

の中の經文ですが、まことに娑婆

三界は、憂患・怖畏に充满した火

宅そのものであり、地獄・餓鬼・

畜生・修羅の三惡・四惡の迷界に

うごめく地上四十億の人々の一

瞬一瞬に放つ一念は、さながら電

光の如くに無尽に交叉しあい、更

に目に見えない靈界の死靈、或は

よこしまな宗教によつてあがめら

れた無数の神々、或は曾つては神
とあがめられながらも、何時しか

人々に忘れ去られて供養をうける
こともなく、惡道の中に墮ち込んで

いる神々、乃至その眷属の類：

…こういつた亡魂・惡鬼・惡靈

は數しれず、それらは、おのく

現象界に対し、よこしまな欲念

をもち、或は神と神とが、靈と靈

とが互に相剋しあつて、こゝに三

災七難、等々の不祥の災難が続発

して來るのです。これが世の現実

なのです。

大聖入も立正安國論の中で、

国土亂れんとする時は

まず鬼神乱る

鬼神乱るゝが故に

と、世の動乱の起る元凶を究明

されていますが、まさしく世の中

は、目に見えない惡鬼・惡靈が充

満し跳梁しています。そしてこれ

を助長しているのが、あやまつた

宗教であり、或は無宗教も、その

一端をになつてゐるのです。

こゝに、上は仏界をたゞえ、同

時に中は諸天善神を法楽しつゝ、

下は惡鬼惡靈を折伏開会して、更

に迷界を救濟するという、一切の

功德を包含するお題目が宣布され

ねばならない所以があります。

本妙律師の高弟であつた優陀那

日輝大和尚が、次のように申して

おります。

唱え奉る妙法は、これ三世諸
仏所証の境界、上行薩埵靈山

別付の真淨大法なり。

ひとたびも南無妙法蓮華經と
唱え奉れば、則ち、事の一念
三千正觀成就し、常寂光土現
前し、無作三身の覚体あらわ
れ、我等行者一切衆生と、同
じく法性の土に居して自受法
樂せん。

この法音をめぐらして法界に
充満し、三宝に供養し、あま
ねく衆生に施し、大乗一実の
境界に入らしめ、仏土を嚴淨
し、衆生を利益せん。

私は、丹波の山の中の滝にこも

つて、現代医学によつても、或は
法華經以外のいかなる宗教によつ
ても救われない人々が、お題目に
よつて始めて救われて行く生々し

い姿を数多く見聞して來ました。
そして人間の幸福、家庭の繁栄
社会國家の興隆、世界の平和とい
うものゝすべては、悉く、このお

題目の受持以外に、依るべき何も

のもないことを痛感して來ました

更に私は、優陀那日輝大和尚の
示す通り、口に唱えるひとたびの
お題目が、そのまま上は仏界に通
じ、中は諸天をも動かし、下は地

するほどの修行をしなければ、
「いやしくも日蓮門下の一人とは
名乗り難いのではあるまいか」

と日夜、みずからを戒めている
次第です。

私が滝を下つて、再び街頭に擊
鼓宣令する日も、さほど遠くない
ことでしょう。

……………＼おわり／…………

二回にわたつた沢田君の手記
には多くの反響があり、お題
目の写經供養の仕方など問い合わせもありました。謹んで
御声援を感謝します。

人道と水車

入社試験問題より

宮本龍一



私は大阪市西区立売堀北通り

るものです。

四丁目六番地に本社をおき、支社

菩提寺は大阪市南区谷町八丁目

れ、私たち家族の者は、子供もろとも一家をあげて、西川上人の御

を東京にもおいて、宮本商事会社

の妙經寺です。このお寺は、去る

指導を仰いでおり、また身延山に

を経営しているのですが、この

七月十八日と十九日の二日間、身

おいて青年行学講習会が年に二回

事業の根本精神は、何といつても

延山街頭布教隊が、大阪と尼崎の

春と夏に開催される時や、身延山

法華経であります。

街頭布教を展開する際、二泊され

には、その都度、私か家内か、どちらかが必ずついて子供たちと共に、それく太鼓をもつて参加し

「資生産業、正法に頼ず」

たお寺もあります。

という法華経の教えを、如説に

住職は西川友義上人。青年の信

仰について深い関心をもつておら

みずからの修行にあわせて、広宣

流布のお手伝いをさせて頂いてい
ることを、何時も無上の喜びに思
つてゐる次第です。

然し、一般青少年を信仰へ導き
青春説教とした青年信仰を、寺社
をあげ宗門をあげて、鼓吹し盛り
上げるということは、なかなか容
易なことではありません。

然し、このことは是非ともやり
ねかねばならないことです。でな
ければ何時になつても、宗門教学
は訓説的な概念のドウ／＼めぐり
から抜けきらず、信行は老人にま
かせたまゝ、國家を背負い、世界
を指導するような卓抜した人材を
宗門より輩出することは出来難い

ことでしょう。

これが出来なければ、いくら広
宣流布といつても空題目にしかす
ぎません。

そこで私は私なりに私の出来る
範囲において、その方向へ向つて
尽したいと思い、今度の私の会社
の入社試験に、次のような問題を
出してみました。読者の御参考に
なれば、幸いと思います。

丸に水中に入れば廻らざして
流るべし。また水を離るれば
廻ることあるべからず。
それ仏家にいう知識の如く、
世を離れ、欲を捨てたるは、
たとえば水車の水を離れたる
が如し。

また凡俗の教義を聞かず、義
務を知らず、私欲一辺に著す
るは、水車の丸に水中に沈め
たるが如し。

共に社会の用をなさず。故に
人道は中庸を尊む。

それ人道は、たとえば水車の
如し。その形、半分は水流に順
順い、半分は水流にさからい昇
りて、運転とごうらざるに

宮本商事入社試験問題

第一問 人道と水車

水車の中庸は、よろしき程に
水中に入りて、半分は水に順
い、半分は水流にさからい昇
りて、運転とごうらざるに

あり。

人の道もかくの如し。天理に

隨いて種をまき、天理にさか

らつて草を取り、欲に隨いて
家業に励み、欲を制して義務
を思うべきなり。

(二) 宮尊徳夜話より)

右の文章を読んで感じたことを
簡明、卒直に書くこと。

第二回

人生において宗教、哲学は必要

か不必要か。いずれかに○をせ

よ。

必要 不必要

その理由を簡明に記せ。

第三回

現代社会において、次の中、ど

れが必要か。必要なものに○を
せよ。

不言実行

有言不实行

不言不实行

有言实行

不言不实行

第四回

知識と觀知と同じか、違うか。

いづれかに○をせよ。

同じ 違う

その理由を簡明に記せ。

△以上▽

三月(未定・交渉中)

身延山大学建設着工のため
休暇が約一ヶ月。この間、身
延山布教本隊は新潟より雪の

佐渡ヶ島へ別動隊は更に九
州大分県下、福岡県下そして
熊本県下まで街頭布教の展開
を予定し、日下現地と交渉中

新春街頭布教予告

正月(決定)

身延山学生の休暇は正月四
日より八日まで五日間。この

間、身延山学生布教別動隊は
埼玉県宗務所布教師会の協賛
により埼玉県下各都市におて
い街頭布教を展開。

第三回

映画「偉大な生涯の物語」をみて

マリアの母性愛に想う

中山玲子

1

聖母マリアが、神の子イエスを生んだのはユダヤのペツレヘム、貧しい旅の馬小屋の中でした。

何故ならば、大工の許婚者ヨセフと共に、ガリラヤ地方のナザレの村を発つて、ようやくたどりついた此の町に、その夜、二人の泊

るべき部屋はなかつたからです。

当時のイスラエルは、ローマ帝国の支配下にありました。イスラエルのヘロデ王は、一方では宥和政策をとることも忘れはしませんでしたが、何時も残酷な恐怖政治を行っていました。国民の評判は、ひどく悪いものでした

悪政にあえぐ国民たちは、信仰

に救いを求め、曾つて賢明な国王の統治下にあって、自由に暮していた頃の、祭壇の神に忠実であることが、何時までもエルサレムを繁榮させるのだ、ということに疑いをもたず、やがてユダヤ教の予言の如くに、救世主が、この世に現われることを信じていました。

こうした時、東方の国から三人

の博士が、エルサレムにやつて来ました。そして、

「予言通り、ユダヤの王が生れたので、その児を探しに来たのだ」と、ヘロデ王に告げました。王は、この言葉を聞くや、自分の地位に不安を感じ、秘かに刺客を放

つて、その幼な児を殺してしまった。

然し、マリアの夫ヨセフは、そ

の夜、神のお告げにより、国王の

刺客の来ない内に、マリアとイエスをロバに乗せ、遠くエジプトへとのがれ出でいました。

ヘロデの刺客は、イエスを殺すため、ベツレヘムの村中の赤児を一人残らず虐殺しにしてしまいました。

この惨状に、いきどおつたエルサエムの人々は、夜ごと秘かにヘロデの死を願いました。

やがてヘロデは死に、国王は変りました。然し悪政は、一層ひどくなるばかりでした。

2

それから三十年の歳月が流れました。エジプトより戻ったマリアとイエスは、故郷ナザレで平和な日々を送っていました。

或る時、イエスは洗礼者ヨハネ

の噂を聞き、母に別れを告げ、ヨルダンの河にヨハネをたずねました。

洗礼を求める多くの民衆の中にまじつてイエスが、ヨハネの前に立つた時、ヨハネは肅然としてイエスをみつめ、イエスこそ神の予言した救世主であることを直感しました。

それは偉大なる洗礼でした。洗礼をうけたイエスは、そのまま神の靈に導かれ、断食して曠野をさまようこと四十日間、苦惱・誘惑・欺瞞・追従・甘言・等々のあらゆる試練に堪え、これをしりぞけ遂に悪魔の誘惑に打ち勝つて神の子としての証しを得たのです。

爾来イエスは、神の福音を伝うべく、ガリラヤの各地をめぐりながら、救世の教えを説いて歩きました。

イエスの後には、彼の宗教的人格を慕う十二人の使徒が従つていました。

ガリラヤのカペナウムを中心にして四方八方へ足をのばしての伝道の途すがら、イエスが実現した奇蹟は、教えるにいとまもないほどでした。

いざりの足を立たせ、盲人の眼

を開き、中風、癪病患者をもたらすところに癒しました。

町の指導者達は、イエスを強敵として、イエス打倒にふみきりました。

やがてイエスは、自分が捕えら

再び墓の中から生き返ったという事実でしよう。

目のあたりに此の奇蹟を見た人々は、その感動をエルサレムに伝えました。

つゞいてイエスのエルサレム入城。こゝには神の神殿があり、神殿の広場は、両替・賭博・商い等々の市場と化して、けがされていました。

イエスは、神を冒涜する市場をこわし、声をあげまして神の福音を説きました。

れる日の近づくことを悟り、過越

の祭の夜、弟子たちを集めて、最後の晩餐会を開き、

「あなた方の中の一人が、私を裏切ろうとしている」

と静かに申しました。

弟子たちは驚き騒ぎました。然

レイエスは、それが誰であるかを示しませんでした。やがて裏切る

であろうユダに対し、悔い改めることを暗黙裡に求める慈悲であったのです。

かねてよりユダは、イエスに失望を感じていました。それはイエスが無知な民衆から慕わるれば慕われるほど、ユダが期待していた

哲学者としてのイエスや、メシヤ

國樹立の夢を托したイエスに、裏

切られたという感をいたいでいたからです。

だからこそ彼ユダは、銀三十枚の報酬で、イエスを探索している

祭司長に、イエスの居る所を教え捕縛の手引きをしてしまつたのでした。

3

トのもとに引きえました。

ピラトはイエスを許そうとしました。然し、あらかじめアンティ

バスに仕立てられた群衆は、

「十字架にかけろ」

と叫び、イエスに荆(いばら)の冠をかぶせました。そして盜賊バラバの身替りとして十字架にかけることになつてしまつたのです

イエスは十字架をかつぐ前に鞭うたれました。皮膚は破れ、血はにじみました。冠からは血が頬を伝つてきました。重い十字架を背負つたイエスは、群衆の罵倒し、或は悲愁する中を分けながら、よろめくように刑場ゴルゴタの丘へと進みました。

イエスが十字架の重みに倒れた

りの声が洩れました。

時、クレネの若者シモンが、イエスの苦しみを見るに堪えかね、イエスに代つて十字架をかゝえ、自からそれ背負つて、イエスを脇にささえました。

刑場には二人の罪人がいました。イエスは衣服をはぎ取られ、十字架の横木に当て、ひろげた両手の平へ釘を打ちこまれ、両足もまた縄木に釘うたされました。

そしてイエスの十字架は、二人の罪人の十字架の間に、高々と押し立てられました。この様を仰ぎ見て、母のマリアや、イエスに仕えてガリラヤから来た女たちの口から、悲しみと祈

刑卒の槍が、イエスの両胸をつき上げました。イエスは天に向つて叫びました。

「我が神、我が神よ。どうして私をお見捨てになるのですか！」

すると、一天にわかにかきくもり、凄じい雷鳴と共に、豪雨が降り出しました。

「父よ、私の靈を、御手にゆだねます」

イエスは、がつくり首をたれました。時に紀元三十年四月七日、

金曜日の午後四時頃のことでした。イエスの死後、その遺骸は、弟子信徒の手によつて葬られました

然し三日後、予言通り墓は開かれ

イエスの遺骸は消えていました。

それはイエスが、彼等弟子の中に、そして無量無辺の信徒の中に復活し、永遠の生命を与えたがためであつたと言われているのです。

4

以上が、イエスの伝記を忠実に映画化した「偉大な生涯の物語」というアメリカ映画の概要ですが、この映画を見て感じたことは、まず第一にイエスの両親である母マリアと父ヨセフの慈愛というものが、如何に深く、如何に尊いものであつたか、ということです。

ヘロデ王の刺客の来る」と予

知するや、赤児のイエスを抱いて

あつた」

果しない砂漠を横切り、遠くエジプトまでも、のがれたということ
そこには通常では考えられないほど深い、親の慈愛がうかがわれる
ではありませんか。

そして三十年もの間、我が子を「神の子」として慈しみ育て、來た母マリアの愛情、十字架上に消えなんとする我が子を、無言で仰ぐマリアの慈愛と信頼の瞳……マリアとイエス……親子でありながら、また神の子とその信者

という立場におかれ、なお一層深く結ばれた二人の絆……キリスト教では、

性を顕発せしめる陰に、マリアの限りなき慈愛をみのがすことは出来ません。

それと同時に、私自身もやがては結婚し、母となる女性の一人として、マリアに学ぶべき多大のものを感ぜずにはおられないのです。我が子を生み、育てる中にも、マリアがイエスに対したような深い慈愛をもたねばならないと思うのです。

まして法華經を信ずる女性としては、生れた赤児が、育ち行く我が子が、法華經の信仰を継承して立派な法華經の信者となり、行者が

となつて行くことを願うならば、

イエスに対したマリアの慈愛に学ぶべきものがあると申せましょ

う。イエスの伝記の中には幾多の奇蹟が物語られています。めくらの日が開いたり、つんぼが聞えるようになつたり、いざりが立ち、中風・癲病がよくなつたり、或は死者がよみがえつたり……然しそういう奇蹟は、法華經を信仰する人々の間では、決して不思議なことでも、珍しいことでもあります。

「イエスは生れながらの神の子で

立派な法華經の信者となり、行者

マリアのことを思えば、私たちは当然、日蓮大聖人の悲母妙蓮尊儀のことが思い浮ばれます。大聖人とイエスを較ぶれば、大聖人の偉大なることは、太陽と月にもたとえられましよう。従つて妙蓮尊儀とマリアの差もそれに順ずると申されましよう。

キリスト教では、神の子はイエス一人と申します。然し法華經では、一切衆生が悉く仏の子であり久遠の本仏釈尊の直弟子である本化地涌の菩薩は、六万恒河沙、無量無辺と申されています。

法華經をたもつものは是真仏子

としては、当然、日蓮大聖人の悲母妙蓮尊儀のことが思い浮ばれます。大聖人とイエスを較ぶれば、大

聖人の偉大なることは、太陽と月にもたとえられましよう。従つて、次のように申されました。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦が、若しこれで落ちて死ななければ、それは一つのまゝです。然し、若し死ねば、多くの豊かな実を結びます」

神の一人子イエスは、その死によつて民衆の中に蘇み返つて行きま

て行くのです。

大聖人は、「広宣流布は大地を的とするなるべし」と申されました。まことに私たち法華經を信する女性は、大地の母、広宣流布の仏子を生み育て、行く母とならねばなりません。

であるという教えよりすれば、仏子として私たちを生み育てた両親

く我が子を、眞の仏子、本化の菩薩として慈愛しなければならないことを痛感するのです。

「妙とは蘇生の義なり」とは大聖人のお言葉ですが、法華經信仰に決定する時、すべての人々が本化の苦薩としてよみがえり、神の天国ならぬ本仏の仏國土は、この地上人間世界に現成され

て蘇み返るのです。

法華經は死によらず、信によつました。

△おわり△

醒悟園本妙庵に詣でて

西沢

縁

「醒悟園」墨太太と書かれあり街の埃の輒穿ける吾

右左二つの川が落合ひて流るるを眼下に本妙庵あり

世の人も遠くに去りぬ谷川の泡の白さと妙法の風

雑僧の面影残る学生が炊きたまひたる飯をいただく

下種の法話ききつつ更けゆく夜の灯はやさしかりし学生の瞳に
天水を溜めて嚴しき行の寺仏陀に曉の光さしくる

昇る陽に動行こゑ力あり谷に林に拡がりてゆく

関西・中京地区

街頭布教紀行

編集部



玄題旗を陣頭に京都御所を行進する身延山街頭布教隊

昭和四十年の年の瀬も追つたが
「みのぶ」教報誌上にも掲載漏れ
ていた夏の関西中京地区街頭布教
の概要を、年の終りにふりかえつ
てみることにしよう。

身延山学生の暑中休暇は七月十
八日からだつた。学期末試験は十
七日の午前中に終つた。

その夜、布教隊学生は、試験勉
強の疲れをいやす暇もなく、休暇
を返上し、岩間布教部長を隊長と
して京都、大阪、そして別動隊は
日高布教主任を隊長として更に尼
ヶ崎、名古屋、瀬戸、小牧、津島
沖之島方面へと長驅連日敢斗の街
頭布教へ出發した。

京 都 布 教

七月十八日（日）

宗務院伝道部・京都宗務所、

布教師会・京都日蓮宗青年会

協賛

夜半名古屋を過ぎる頃より雨が
降り出して止むことなく、夜明け
頃には簇つく雨と变成了。

午前七時半、雨しづきにけむる

京の街に入り、八時、岡崎の満願
寺に到着。こゝで東京より西下し

て来た宗務院伝道部と合流。朝食
の供養をうけ、午前九時、予定通

り行動開始。

雨はなお降りしきる。然し布教
にやり直しはきかない。衣類が雨
にぬれば、かわかせばよい。風
邪をひいたら薬をのめばよい。倒
れる者があつたら病院にかつぎ込
めばよい。

隊員の意気ます／＼軒昂。雨を
ついて二流の玄題旗を押し立て、
法鼓を打ちならして満願寺より、
平安神宮の前を通り、京都御所へ
と向つた。

御所の入口につく頃には、雨は
下着までしみ通り、衣の袖にジズ
リがたれていた。

だ。

その後、今出川の本満寺へ進み
更に市役所前より、京都市中でも
最も賑かな河原町繁華街を行進、
帝都開教を宣言されたあとを偲ん
だ。

丸山公園へ向つた。
聞けば河原町筋は、交通頻繁な
広い。晴天の日曜であれば、観光
客ににぎわり此の庭も、簇つく雨

の中では、人の影すら見当らない
雨に煙る御所の庭を、一列縱隊
足なみを揃え、擊鼓唱題の声も堂
堂と建礼門にさしかゝれば、さす
がに日蓮門下の信徒が数十名、手
に傘をさして出迎えていた。
こゝで一斉に自我偈を奉唱。そ
の昔、京都開教の祖（大本山妙願
寺開山）龍華日像上人が、建礼門
の内にある日の御門の前に立つて
帝都開教を宣言されたあとを偲ん
だ。



河原町一番の繁華街で、布教隊も負けず、内市通りに沿って京都行進する

ため、特別に祇園祭のダシと、日

かまえる人をみかける。

蓮宗御会式の万灯行進しか隊列通行を許していないといふ。

この日あたかも祇園の本祭の翌日に当たり、雨の中とはいえ、人出は普段より遙かに多い。

雨に打たるれば打れるほど、法

鼓の響きもより強く、唱題の声もより高く、車をさけ、人並みを払つて行進する中、随所にカメラを

本山妙覺寺、大本山妙顕寺を参拝

思わず時間を超過し、その後、

た。

正午、本山本法寺で中食、午後より本法寺本堂にてベトナム戦争

る山田日真窓下が、老衰臥床中の体であるにもかゝらず、侍者にたすけられながら、わざ／＼本堂前まで出迎えられ、感動に溢るゝ涙もぬぐわず、ふるえる手をあわせ、細い声をぶりしほつて、「皆さんの御健斗を祈ります。一

天四海皆帰妙法、末法万年広宣流布……南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經」

と布教隊を挨拶されば、その一言が寸鉄の如く、並みいる隊員の肺腑をつらぬき、中には思わず手で、目をこする学生の姿もあつた。

本山妙覺寺、大本山妙顕寺を参拝したが、妙顕寺では九十才をこゆ

犠牲者追善、怨親平等の大法要を
厳修。つゞいて、

「現代社会における日蓮門下の使
命について」

と題する岩間部長の大講演会。

聴衆は街頭布教参加の寺院檀信徒
ならびに本法寺貫首湯川日淳猊下
の総監する靈山会会員の人々。熱
情を秘めた静かな部長の論調に、
日蓮門下の一員として使命を痛感
し、その立場くゝにおける、自ら
の菩薩行を尊わずにおれないもの
があつた。

午後二時、布教隊はバスで深草
の宝塔寺を参拝。山門の左下に日
像上人の荼毘所、右側に壇口審上
人のお墓をおがみ、本堂の脇から

裏山へ登れば、その中腹に日像上
人の御廟所があつた。

こゝは曾つて日像上人が、他宗
を折伏逆化した説法石の残つてい
る法論の跡である。

布教隊は御廟所にぬかずき、日
像上人の精神とその実践を現代に
復活すべき急務を痛感しつゝ、こ
れよりおよそ一丁ばかりの所にあ
る元政庵に詣でた。

元政庵の門前には、大阪より明
淨学院女子高校の料理の先生をし
ていい今年八十七才の赤坂先生が
太鼓をもつて応援にかけつけてお
られた。

先生は、これまで身延山布教隊
が関西に来るたびごとに、老嫗を
襲うつて必ず行進に参加されてお
り、学生もすつかりなじみになつ
ていた。



出發し伏見の
布教隊、先頭
を向う
本山法寺へ
宝塔寺は岩間部長

なつかしいやら、うれしいやら

ぐつた。

いたわしいやら……学生たちは我が祖母を抱くようにして山門をく



宝塔寺内の日像上人御廟所にて

元政庵は鷲峰院元政大和尚の遺跡。寺号は瑞光寺と称するようになつてゐるが、本堂は昔のまゝのカヤブキ。その内の須弥壇に安置されている本尊の釈尊像は、体内に五臓六腑をはらんでいること有名である。

人間と等しく五臓六腑をもつた

釈尊像は、イソド・中国・日本の三国仏教を通して珍しいものであるが、生身の釈尊そのものを久遠実成の本仏と仰ぎながらも、敢て人間と同じ五臓六腑までも藏さしめねばおられなかつたところに、元政上人の仏陀觀、ならびにその

境内は鉄道線路で二分されてい

た。線路の向う側には、元政上人

のお墓が欄にかこわれて、しづま

りましていた。

お墓は、苔むす土マンジユウに竹三本。

こゝにも後年、本妙日臨大和尚や優陀那日輝大和尚等々の大人物を生み出した元政上人の、風格の一端が偲ばれる。

幸い雨は、宝塔寺と元政庵を参拝する間やんでいた。ところが、この日の最後の布教地である伏見の大手筋商店街に到つた時、再び僅つく雨に見舞われた。

夏の夕立ちと思つても、雨のあがるのを待つてゐる暇はない。雨

をついて市街を擊鼓行進し、午後五時、この通りすじの本教寺に集結。最後の獅子吼をなして宗務所役員・京日青・寺院各聖檀信徒と別れを惜しみ、宗務院の伝道力へ



深草元政庵本堂前にて

と共に布教隊は、バスで一路大阪へ向つた。

以上で京都街頭布教の概要紹介を終るわけであるが、身延山布教本隊が京都をおとされたことは、今回が初めてであるにしても、別動隊は曾つて昭和三十八年の正月冬休みを利用して、日蓮大聖人の青年時代、遊学研鑽された比叡山の横川常光院の靈跡に詣で、京都各本山を擊鼓巡拝したことがある。その折、設立したばかりの京日青の各師と、本法寺で一夜座談討論の機会をもつたことがあつたが、その時にくらぶれば、今日一日中布教隊を世話し指導支援された活躍ぶりには、目をみはるほどの飛

躍がうかゞわれ、まことに敬服せざるを得ないものがあつた。

さて布教隊は、夕刻大阪市南区谷町の妙経寺に到着。住職西川友義師をはじめ禮信徒、婦人会の手厚いもてなしをうけ、身延出発以来の布教の疲れをやすめたが、布教隊が深い眠りに落ちて夜半でも、妙経寺婦人会は、雨と汗でドロドロになつた五十名の隊員の、衣や袈裟をかわかし、白衣・手甲・脚絆・地下足袋までも洗濯していた。



大 阪 布 教

七月十九日(月)

宗務院伝道部・大阪宗務所・
布教師会・修法師会・大阪日
青協賛



大阪街頭布教出発に当つて力強く挨拶される
身延山本願人会大阪支部長 岡本宗治氏
— 岡本社本社事務所前にて —

この日は、昨日と打つて変つた晴天。午前七時妙経寺をあとに、バスで市内西成区玉出本通りの岡本組本社ビルの前に集合。

こゝは身延山本願人会大阪支部長岡本宗治氏の建築事務所。事務所の前には、紅白の幟幕がはりめぐらされ、ビルの屋上よりは、

迎 日蓮宗總本山

歓 身延山街頭布教隊

身延山本願人会大阪支部

と大書された引幕が垂らされ、同様の文句で、戸板一枚大の立看板が町内隨所に立てられていた。

これだけの歓迎は、身延山街頭

平和斗争に半和なし

つた。

布教始つて以来、曾つてない盛大

一、立正安国

玉出本通りの商店アーケード街

なことであるが、こゝにも岡本氏

立正是人づくり

より千本通りを過ぎ、鶴見橋通り

の身延山街頭布教に対する熱誠の

安國は国づくり

から萩ノ茶屋の本通りと行進し、

ほどがうかゞわれる。

等々という標語が大書されてい

スラム街釜ヶ崎の三角公園に到つ

この日、街頭布教隨喜参加の人

た。

々は、大阪市内はもとより奈良・

高槻・尼崎・河内・松原・等々の

刻一刻、参加の人々が集結し来

高槻・尼崎・河内・松原・等々の

り、街頭布教の気運はいよいよ高

調。

各所より駆せ参じ、僧俗あわせて

およそ千名あまり。

大阪布教師会長和田龍蓮師と岡

僧陣は悉く手甲脚絆に身を固め

本氏の力強い挨拶があつて、定刻

九時、堂々の大行進に移つた。

行進は教丁にも及ぶ長蛇の列とな

り、布教隊の学生の半数が隊

列の外側に点在して太鼓の調整に

員は、手に手にプラカードを高く

と持つていた。

プラカードには、

二人一組となつて教箋の配布に當

つた。

一、合掌と平和

玉出本通りの商店アーケード街

より千本通りを過ぎ、鶴見橋通り

から萩ノ茶屋の本通りと行進し、

スラム街釜ヶ崎の三角公園に到つ

た。

こゝは釜ヶ崎の浮浪者たちが常

にたむろしている所。先年、自動

車の焼打ち事件、警察署焼打ち事

件、等々の大暴動の発生した時、

その根拠地にもなつた所である。

この日、玉出を出發してより、

およそ三時間、街頭の隨所において、或は二ヶ所の公園内において

果敢な街頭獅子吼に立正安國を訴

えて來たが、三角公園に予定して

いる道路説法こそ、この日の布教

の山場であつた。

が一団となつて、見張るが如く突
つ立つており、公園を見おろす二
階の窓からは、望遠レンズをつけ
た数台のカメラの目が、一齊にそ
い。

が一團となつて、見張るが如く突
つ立つており、公園を見おろす二
階の窓からは、望遠レンズをつけ
た数台のカメラの目が、一齊にそ
い。

が一團となつて、見張るが如く突
つ立つており、公園を見おろす二
階の窓からは、望遠レンズをつけ
た数台のカメラの目が、一齊にそ
い。

か知れない。

先年の大暴動も、さういはハズ
ミから起つてゐる、説法中、再び
大暴動が起らないとは保証されな
い。

果せるかな、公園の周囲には百
名近くの浮浪者が、所在なき気に
木蔭やベンチにゴロ／＼して、いた
千名をこゆる布教隊が、撃散し
て公園の中央に陣取つても、彼等
は今までの場所を動こうともせず
或は寝そべり、或は坐り込んだま
ま、チラリ／＼鋭い目を光らせて
は、何やら互にさゝやきあつてい
た。

が一團となつて、見張るが如く突
つ立つており、公園を見おろす二
階の窓からは、望遠レンズをつけ
た数台のカメラの目が、一齊にそ
い。

が一團となつて、見張るが如く突
つ立つており、公園を見おろす二
階の窓からは、望遠レンズをつけ
た数台のカメラの目が、一齊にそ
い。

が一團となつて、見張るが如く突
つ立つており、公園を見おろす二
階の窓からは、望遠レンズをつけ
た数台のカメラの目が、一齊にそ
い。

が一團となつて、見張るが如く突
つ立つおり、公園を見おろす二
階の窓からは、望遠レンズをつけ
た数台のカメラの目が、一齊にそ
い。

た婦女子の身は更に危険だ。

公園が修羅乱斗の場となれば、

二階の窓にすえつけている数台の
望遠カメラは、得たりとばかりに
撮りまくり、テープコーダーは錄

音して、このニュースは各新聞社

に売り込まれ、全国的に報道され

ることだろう。学会の機関紙が、

これを大々的に取り上げて、
「浮浪者と乱斗した無慈悲な身延
山布教隊の醜惡」

と悪口雜言の限りを尽すことだ

ろう。

たとえそれは後刻のことではあ
つても、乱斗直後、布教隊はメチ
ヤ／＼になつた姿をして一步も町
を歩かれたものではない。

布教は中断・解散し、布教指導
者は、その責任を宗門内外にとわ
ねばならない。

されば布教隊の者は、如何に學

会員の浮浪者たちが、因縁をつけ
暴動をしかけて來ても、微塵も抵
抗することがあつてはならない。

たとえ打たれても蹴られても、
日蓮大聖人が鎌倉街頭にあつて悪
口打擲の難に忍ばれた往時を憚ん
で、無抵抗、非暴力に徹し、打た
れても南無妙法蓮華經、蹴られて



奈良県身延山本願人の一行
奈良立正華山会遠山先生をはるじめする

れば、それが十人となり、百余の暴動のハズミとなつて行く。



街頭に獅子吼する
日高白象師

も南無妙法蓮華經、血を流しても
南無妙法蓮華經と、合掌の手も固
く、むしろ迫害する者をも礼拝す
る人間礼拝に徹しておらねばなら
ない。

跡として後代にまでも語り伝えら
れることだろう。

身延の布教隊、そして布教に參
加した千余の現地寺院檀信徒に、
この実践が出来るのであれば、そ
れは何と素晴らしいことだらう。三角公園は昭和法難の靈

尾の者が到着した。この時、一斉
に擊鼓が止つた。マイクを握んだ
のはベテラン日高白象師だつた。

その獅子吼は意表をついた。そ

の概要は、まず身延山布教隊が釜
ヶ崎布教に重点の一つをおいた所
育、訓練がどれほど出来ているで
あるか、と顧りみる時、冷汗三
斗の思いを禁せられない。
今は、創価学会の作戦にはまつ
てはならない。彼等群衆の中から
言いがかりや因縁をつける者を一
人でも出してはならない。一人出

の国の不可触賤民八千万の、悲惨
な歴史と現実を紹介し、その不可
触賤民八千万解放の原理と祈りを
こめて、インド独立の父マハトマ
・ガンジーが、みずから南無妙法

蓮華經と唱えつづけていたという事実、更にガンヂー翁が回印西教の三千年来の相剋を融和統一せんがために、東方の正法南無妙法蓮華經を唱えつづけていたという事実、或は西天インド開教に赴いた日蓮宗の一青年僧を、撲殺しようとしたインドの暴漢に対し、その青年僧が、鮮血淋漓たる虫の息の中に、その暴漢の償罪と未來成仏を折つて、南無妙法蓮華經と三たび合掌礼拝したまゝ息絶えたといふ人間礼拝の話をして伝え聞いたガンヂー翁が、涙を浮べながら、インド独立の、いな世界恒久平和実現の道が、こゝにあつたと感動した逸話の一端を紹介し、ガンヂ

一翁のこのお題目こそ、昭和五年八月二十五日、身延山奥之院思親閣を基点として西天開教に赴いた日蓮宗の一沙門より伝授されたものであり、今やインド民衆の多くがガンヂー翁に習つて南無妙法蓮華經と唱え、釈尊が八ヶ年間法華經を説かれた王舍城靈鷲山頂に、世界第一の仏舎利塔が建立されようとするに当り、本年正月身延山より、その仏舎利塔の正面本尊として金銅の釈尊像が寄贈渡印したといふ國際的仏事を述べ、本仏誕日蓮大聖人の身延山とが、法華經によつて結ばれる時、日印西国両山一体の血脈の中にアジアの仏

教は開闢され、世界平和の根幹が確立されると断定し、その文証として、「日は東より出て西へ入る。日本の仏法の月氏（インド）へ返るべき瑞相なり」

「日蓮が弟子檀那等は、身延の山を本として参るべし。これ靈山の契りなり」

「日蓮が弟子檀那等は、身延の山を本として参るべし。これ靈山の契りなり」

「日本人よ、身延山に帰れ」と言葉を結んだ、それは、あたかも天來の声の如くであつた。

聴衆は、布教隊の者も、商店街の人々も、そして公園内外に賛集

していだ釜ヶ崎の住人、浮浪者も

どんく無料で配っています。

創価学会の人達も寂として声なく
魂の底から心ゆすぶられるが如く
聞き入つていた。

浮浪者の一人が身延の学生の衣
の袖を引いて訴えた。

「私も曾つて浄土真宗の僧籍に
あつたものでした。事情あつて釜
崎に落ちて来ていますが、これを
契機として、必ず釜ヶ崎からぬけ
出して、貧しくとも後指をさゝれ
ない坊さんになろうと思ひます」

と感概深げに語り、更に、

「今こゝにいる人たちは、みな創
価学会の会員です。釜ヶ崎では学
会の布教は盛んなものです。学会

の新聞や雑誌やパンフレットを、

貴方がたも折角身延山からはる
ばるこゝまで布教に来られたのな
ら、後に残る印刷物を、もつと沢

山もつて来て、ありあまるくらい
配つて欲しかつたと思ひます。

これは私の善意の意見ですが、
今後の参考になれば幸いです」

と言つていた。

布教は成功だつた。一人も因縁

をつける者は出なかつた。

布教隊は深い感動を後に残し、

て本堂で、

「世界平和と法華菩薩道」

と題する岩間部長の大講演、二

時三十分より大阪宗務所長奥邸学

進僧正大導師となつて、ベトナム

戦争犠牲者慰靈法要と世界立正平

再び擊鼓行進を起し、飛田大門通
りからザヤン／＼横町へと繁華街
を通り、天王寺動物園前広場に到
つた。

こゝから待機中の十数台の貸切

バスに分乗し、午後の部の行われ

る南区中寺町の雲雷寺へと向つた

バスが発車する時、数名の浮浪

者が涙をふき／＼盛んに手をふつ
て別れを惜んでいた。

この人たちは釜ヶ崎の三角公園
から布教隊のあとについて、一緒に
にお題目を唱えつゞけていた人々
だつた。

和祈願祭を慶修。

この法要直後、布教隊は別動隊を残して身延帰山の途につき、一方本堂では宗務院伝道部によつて

「日蓮聖人一代記」の映画が上映

され、午後五時、大阪街頭布教は有終の美をもつて終了した。

なお午後七時より中寺町の妙徳寺において、大阪寺院各聖ならびに檀信徒有志によつて、身延山布

教隊歓迎祝賀会が催され、

「日蓮門下にして身延を誹謗し、僧侶に悪口する者は、城者破城、

獅子身中の虫であり、創価學会よ

りも惡質である。異体同心ならば

万事を成し。同體異心ならば諸事

かなうことなし、という祖訓を日

常に守るべきである」

という岡本氏の提唱があり、万場の拍手を浴び、和気アイの心中、晩餐会を終了。

宗務院伝道部は次の日程のため

京都郊外布教をめざして出発し、別動隊は前夜と同じく谷町の妙経

寺に宿投、書院において信徒有志と共に、信仰座談会を夜おそくまで開き、青少年に対する今後の信仰指導の在り方について語りあい、今日一日の布教の意義を更に加えた。



三角公園に蝶集する笠ヶ崎の人々
中央の天台笠の人は岡本宗治氏

かえりみれば身延山の大阪街頭布教は、本隊としては京都と同じく初めての試みであり、別動隊と

しては昭和三十八年の夏、天王寺駅前より雲雷寺まで行進しており三十九年の三月に八尾市、同年

七月には生野区一円に擊鼓し、四十年三月には布施市に展開しており、通算すれば今回は四回目に当つてている。

前回は生野区を中心として学会折伏を先とした。今回は西成区を中心として釜ヶ崎布教に重点をおいた。

こうして大阪という大都市も、毎年地区別に重点的布教を積み重ねて行けば、その効果もまた大きいものがある。

但し西成区といつても釜ヶ崎のようなスマム街ばかりと思つては大へんな間違いである。スマム街はごく一部にすぎない。そして西成区には、それは同本組の本社の大坂天王寺動物園前にて

隣りではあるが、道徳教育では全国的に折紙のつけられた中学校もあることを忘れてはならない。

考えねばならないことは、この広い西成区の地域に、いまだ一軒の日蓮宗の寺院も教会もないということであろう。

尼ヶ崎布教

七月二十日（火

主催 尼ヶ崎市寺町長遠寺
協賛 兵庫県東部宗教事務所、尼ヶ崎市内寺院教会

二十日夜の白夜頃、朝食の供養をうけた別動隊十二名は、生野区法見寺高木龍修師の差し廻わされ

たマイクロバスで妙経寺を出発、

早朝のまだ車の通りも少い大阪市街を突つ走つて尼ヶ崎へ向つた。

別動隊の装備は、二流の玄囃旗、二台の携帯マイク、教箋およそ二

万枚。

七時、寺町長遠寺に到着、荷物をおき、住職池田博隆師の案内で阪神尼ヶ崎駅に集合。

定刻まで相当時間があるを辛いさつそく、その駅頭で説法を展開

その間宗務所長富田栄妙師をはじめ市内寺院檀信徒が陸続として集合。その数およそ二百名、中に辰巳妙隆法尼の一行のなつかしい姿もあつた。

午前九時行動開始、駅前のバス

ターミナル公園から大通りに向つてまず一声をあげ、アーケードの

中央商店街を行進すれば擊鼓はアーケードに反響して耳を聾むばかり。

市民の耳目を驚倒しながら、三

和商店街と交叉する十字街に到着すれば、こゝは絶好の布教場所だつた。獅子吼することおよそ一時間、教箋は雑沓する通行人に、かたづばしから手渡された。

行進は、更に昭和商店街からバス大通りへと進み、阪神電車の踏切り附近で再び説法展開。全行程約四キロを行進して寺町長遠寺についたのは正十二時。境内には、

辰巳妙隆法尼（先頭）の一行



重の塔が、蒼空にそびえていた。

一時間の小憩中、中食をすませ午後一時より戦争犠牲者慰靈・立正世界平和祈願法要を厳修。ついで、

「王仏冥合の世界」

ついたのは七時半。直ちに書院に

の権門軍閥に迎合して行つた立正

おいて、宗會議員長谷川正徳師・

報國思想の妄想を破折する中、思

本遠寺伊藤友情師・別動隊日高白

わす時間超過。三時五十分、講

象師を囲んで、中部行学会青年部

演を終了し、挨拶もそこへに駅

・今遠寺青年会そして別動隊学生

にかけつけ、阪神電車で大阪へ出

からなる青年座談会が開かれた。

、四時発の準急に飛び乗つた。時

譲畠は、

間はぎりぎりだつた。

「如何にして一般青少年を法華經

プラットホームには法見寺の信

徒である大阪駅前料亭「瑠璃」の

家族の方々が、隊員の夕食弁当を

「信仰へ導くか」

特別調理して見送りに来ていた。

「教学・思想・情操の教育も確かに必要であるが、根本的には、何

空の六時三十五分。既に身延山大

年と交ふことが肝心である」

家用車をつらねて待機していた。

といつた一言は、まことに頗る



と題する日高隊長の講演会。こ

の内容は本誌連載中なので割愛す

るが、日蓮大聖人の立正安國の大

義を顕示し、創価学会の王仏

これに分乗して熱田の本遠寺に

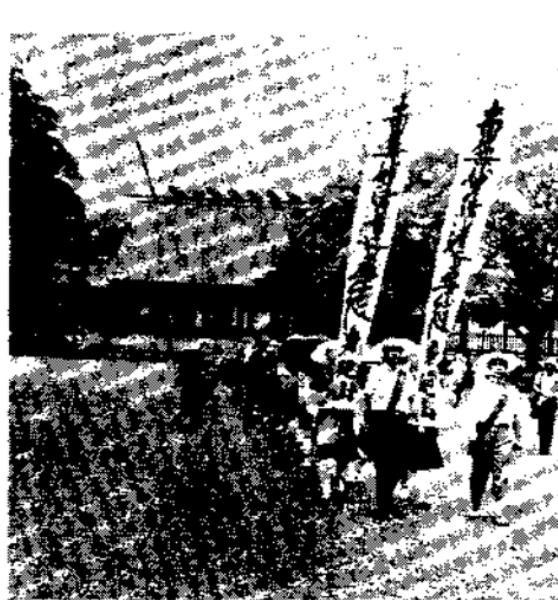
に値するものがあつた。

さて明日よりは名古屋を中心とする衛星都市の街頭布教。主催は中部行学会。

名古屋布教

七月二十一日(水)

朝より小雨。一日中雨かも知れない。然しちゃ都布教の例もある。どんな大雨の中でも、予定通り布教を決行する決心を述べ、伊藤師をはじめ中部行学会青年部各聖、本遠寺信徒有志と共に、玄題旗を陣頭に本遠寺を出発。まず熱田神宮へ向つた。



熱田神宮社頭より市街へ向う布教隊
—先頭右が伊藤友情師—

に心願を奉上してより房州清澄山へ帰る途中、参籠祈願された所ともいわれている。

社頭自我偶一巻を誦詠し、神宮の森の脇の榮立寺に参拝。勧請さ

れている清正公さまに法味を供え
る中、雨は益々ひどくなつて来た
で二台の携帯マイクをつないで街
頭説法を展開すれば、雨をさけて
国鉄熱田駅前まで行進し、駅前

こゝは日蓮大聖人が、伊勢大廟

駅やバスの待合室に集つた人々も熱心に聴き入つていた。

やがて一行は貸切バスに乗り、



雨をついて一路「靴塚」へ向つた

靴塚とは伊勢湾台風の折、二百

八十有余人の生命が、一挙に潮流にのまれ、水の引いた跡に、無数の靴が浮いていたという、痛ましい災害の跡である。

今こゝには、殉難者の慰靈碑が立てられているが、その一周忌に身延山布教隊が、名古屋街頭布教の砌り、参拝したことがある。

今年は、あたかもその三回忌、別動隊は再び慰靈碑の前にぬかずき、ねんごろに慰靈の法要を行つた。

雨の中、遺族や近所の人々も集つて来て、災害の悲しみを新たにすると共に、再びこういう災害の

起らないように、と祈らずにはおられなかつた。

すつかり雨にぬれしほれてバスに乗り、中区古渡町の休玄寺に到つて早目の中食。

正午こゝを出発し、千種駅前から千種郵便本局まで警戒行進。雪は低く垂れて市街をおゝい、雨の足音はます／＼強くなるばかり。京都の雨よりもつとひどい。歩く速度は勢い早くなる。信徒もおくれじとついて来る。

千種郵便本局の前で、電車通りに向つて説法中、布教隊のスレネズミになつた余り格構もよくない所ばかりをねらつて、盛んにカメラで撮りまくつてゐる男がいた。

多分創価学会の者かも知れない。

学生の一人が、その男をたしなめると、遠く退いて、今度は星遠レンズをつけて写していた。

「ダニだな」

と信徒が笑つた。

瀬戸布教

これより一行は、再びバスに乗り、長驅して瀬戸市へ向つた。瀬

戸は瀬戸物焼きの本場であるが、こゝにはたゞ一ヶ寺の日蓮宗宗林寺しかない。住職は家田芳信師、身延山大学を卒業して間もない新進気鋭の青年僧。

バスが瀬戸市より一つ手前の小さな町にさしかつた時、

「予定では、この町筋を行進することになつていて」

と教つた。そうと聞いて後には

引けない。然し雨はます／＼ひどく、舗道を洗い流している。

「別動隊だけで歩こう」

隊長が声を励ますと、

「水行だ」

と学生たちがバスより飛び出した。

豪雨に加えて風も強い。玄題旗

は立てもおられない。天台笠をかぶついても、笠を通す雨に、目もあけられないほどだつた。

進むこと約数丁、再びバスに乗

り、信徒の御婦人連に、

「御苦労さま」

といわれて、ニヤリツとしたのが愛嬌だつた。

瀬戸につき、宗林寺檀家の飲食店で休憩。その間、温いウドンの供養にあづかつたが、雨に冷えた

体には、これほど美味しい御馳走はなかつた。

休憩中、幸い雨があがつて、いよいよ行動開始。市内の中央に流れれる河にそつて約三キロ、宗林寺へ向つて擊鼓大行進を起した。

行進する中、市の中央にある商店街の角に深川神社があつた。屈強な布教場所である。布教隊は神社の石段に陣取り、十分ごとに



が迫り、名古屋の一行はバスで帰途についた。寺では日高隊長の講演があり、座談会の後、別動隊はここに一泊。温い檀信徒のもてなしに、雨の中の布教の疲れをやすめた。

これより北外山・桜井の町を行進し、小牧南小学校前で市内寺院各聖檀信徒総員と合流。この中に名古屋より駆せ参じた金曜会信徒十数名の白衣姿が、きわ立つて見えた。

小牧布教

七月二十二日（木）

時間あまり、隊員交互にマイクをとつて折伏逆化。スピーカーの声は河の上を流れて、市中につぶやかれた。

瀬戸より小牧まで約十里。早朝別動隊は宗林寺檀信徒と別れを惜みつゝハイヤーに分乗、小牧へ向つた。

宗林寺に着いた時は、既に夕闇

現地では小牧郊外の南外山国道筋で、伊藤師をはじめ中部行学会青年部、尾張千人講中の東講をはじめとする近郷檀信徒に迎えられ撃鼓して妙藏寺に参拝。

別動隊は連日同じ布教をくりか

えしていても、聴く人は常に違つてゐる。殊に小牧では初めての身延山街頭布教である。

説法者は心氣新たに熱血をほとばらすれば、市民も熱情に引かれ、耳をかたむけている。

これより片町・向町・寺裏を行進し、西町の小牧神明神社に到つて街頭布教を終了。市内寺院各聖の案内で、小牧の古戰場趾の山へ登つて中食。

午後一時、一ノ宮市内に入り、大正通りの真淨寺にて住職石川友英師をはじめ尾張千人講中檀信徒と合流。直ちに行進にうつり、眞清田神社の参拝をすませて正門より、本町通り、駅前通りの商店街を撃鼓、駅前広場で街頭説法をふつ放つ。この間およそ一時間あま

一ノ宮布教

この日の日程によれば、小牧市

より一ノ宮市、更に津島市を経て七宝村までとゞかねばならない。

都市と都市との距離は相当なものである。しかも布教現地では一

分でも多く布教しなければならない。

車は制限速度一杯にスピードをあげた。



り。

午後二時、再び車に分乗し、身延山本願人賀島一雄氏の先導で、長駆津島市へ向つた。

と叫ぶ身延山大学
山田英美君

天に二日なく
地に二人の
日蓮聖人はない

津島布教



瑞円寺の佐々木友峰先生による驚峰の獅子吼する

宗であるだけに、住藤太田鳳教老師の喜びは一方ではなかつた。

寺の由緒は古く、加藤清正が少

市街入口の江川町賀島氏宅に小憩し、こゝより上町・津島神社前

天王通り一丁目・池須町・橋詰町二丁目・一丁目・一本町三丁目を行進し、今市場の妙延寺に参拝。

妙延寺は市内たゞ一ヶ寺の日蓮

年時代、この寺の寺小屋で勉強したという。境内に「草紙掛の松」という木が残つてゐるが、それは清正が書道稽古の草紙をかけた松

と伝えられてゐる。

こゝで小憩三十分、その間、隊

時代、この寺の寺小屋で勉強したという。境内に「草紙掛の松」という木が残つてゐるが、それは清正が書道稽古の草紙をかけた松と伝えられてゐる。

午後三時十分、妙延寺を出発、本町三丁目よりヨシヅヤデパートの前に到り、こゝで果敢な獅子吼の展開。更に名鉄津島駅前にて、もう一度説法をして当市の布教を終了。

小牧より此処まで行動を共にして来た名古屋の金曜会の人々や、妙延寺僧信徒と別れを告げ、別動隊は再び車に分乗、このシリーズ最後の布教地である海部郡七宝村の沖之島瑞円寺へと向つた。

七宝村とは有名な七宝焼を産出

する所、瑞円寺は鷲峰第二期生佐々木友学師のいるお寺である。

沖之島周辺布教

瑞円寺へ一キロといふところの町で車を降り、町角で街頭説法をしてより、夕陽にはゆる七宝村を撃鼓しながら、沖之島の瑞円寺に入れれば、檀信徒も撃鼓して迎える中に、長谷川正徳師の慈顔があつた。

長谷川師は中京地区街頭布教の最後を飾るため、且つは隊員の労をねぎらうため、万障くりあわせ

て来山されたものである。

津島駅前広場の説法風景

「よくやつた」

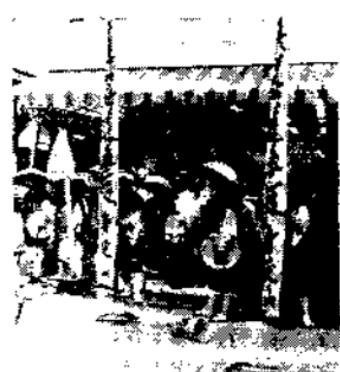
「よくやつてくれた」

と、ねぎらう長谷川師の一聲を聞いた時、身延を発つて以来、連日長驛、炎暑にさらされ、雨にも打たれて、舗もしきむほど敢斗して来た苦労も、一べんに吹き飛ぶ思いがした。

電灯の光りもこくこくたる本堂で、さつそく宗門興隆・世界平和祈願法要を厳修。

つゞいて佐々木師の手より、別動隊員の一人／＼に、檀信徒が丹誠新調した白衣が、一枚ずつ手渡され、感激一入のものがあつた。

そのあと伊藤友情師、長谷川師



聖は、それと車を運転して帰途

についたが、宗林寺の家田師は瀬

戸へ、正興寺の橋内師は岐阜へ、

西林寺の長谷川師は稻沢へ、真淨

寺の石川師は一ノ宮へ、そして本

遠寺の伊藤師、蓮乗寺の加藤師、

万行寺の浜島師、法華寺の太田師

真柳寺の吉田師等々は、同じ名古

屋へ、それと遠く帰つて行つた
思えば青年の結束、これがなく
ては出来ない布教であつたといえ
よう。

はみせられない。

「また水行だあ」

別動隊は元気に出発した。まず

甚目寺本堂前に整列して、太鼓も

破れるばかりに折伏のお題目をた

きこみ、門前町で真言亡國の真

義を明かにし、雨をついて町を一

巡、お昼前に瑞円寺へ引きあげた

午後、瑞円寺々族檀信徒と別れ

を惜み、車で名古屋へ出、一路身

延帰山の途についたが、七月十七

日身延を出發してより丸一週間、

京都・大阪から名古屋周辺に連日

長驅したものと、すんでみれば、

もつと続けて行きたい僧道一路をたどる街頭布教だつた。

最後に、この布教に御指導、御



雨に煙る甚目寺門前にて
真言亡國を叫ぶ別動隊

支援、御供養、御世話下さつた寺

院各聖檀信徒に対して衷心より感謝の意を述べ、一層行学の二道に

精進して、身延を本とする広宣流布実現の日の、一日も速かなならんことを期すると共に、今後一層の御指導、御支援をお願いするものである。

△了△



新春二月下旬

福岡県下の街頭布教

日蓮宗の街頭布教は、日蓮宗

二月二十二日 豊前地区

ならでは……という独特の布教

二十三日 東筑地区

として逐次全国的に宗風を宣揚

二十四日 西筑地区

するに至つて。この中にあ

二十五日 博多地区

つて福岡県下の街頭布教は、宗

二十六日 筑後地区

務所長木島智境上人の熱誠のも

福岡県は日高白象師の出身地

と、宗務所、県内寺院、立正青

二月二十二日 豊前地区

年会が打つて一丸となつて自發

二十三日 東筑地区

的に盛り上り、今や年中行事と

二十四日 西筑地区

して回を重ねること数回にも及

二十五日 博多地区

び、全宗門の詔目することころと

二十六日 筑後地区

なつてゐるか、昭和四十一年は

驚峰一期生沢田覚象・同二期生

新春早々、次の日程にもどすい

小林白峰の二名をつれて隨喜參

て展開されることとなつた。

幸いである。

本誌合併号の事由と その誌代について

鷲峰会の行学根本道場である醒悟園本

妙庵は、開山本妙日臨大和尚以来の伝統により、宗門の人材養成をもつて使命の第一義としています。

波木井の醒悟園で開山大和尚の訓陶をうけたのが、後に近代宗門教学の鼻祖とされたわたれた優陀那日輝大和尚。日輝大和尚は故郷金沢で恩師の醒悟園にならつて

充治園という学舎を開き、この中より明治の三傑とされた身延山七十三世文明日薩・七十四世自厚日鑑・七十五世心妙日修という三代法主を生み、この三師によつて明治の廢仏毀釈を乗り越え、身延山と日蓮宗を泰山の安きにおくことが出来たのです。

出来たのです。

今や宗門の危機の警鐘乱打されている時、この時こそ、醒悟園は開山大和尚の精神にのつとり、宗門今日の危機を乗り越えて、更に宗風を宣揚し、身延山を本として国内はもとより、遠く海外の果てでも、正法宣布に挺身してゆく人材を輩出しなければなりません。

もとより宗門には人材養成の機關として立正大学、身延山大学、そして信行道場、荒行堂、或は布教院、布教研修所、等々もありますが、然し常住不斷の本化によって明治の廢仏毀釈を乗り越え、身延山と日蓮宗を泰山の安きにおくことが本化の僧道の確立——このため醒悟園

は、その本来の使命の第一義を発揚すべく、四十年四月二十八日の立教開宗会を期して、本格的な準備体制に入つて行きました。

その画期的な内容については、いずれ本誌にも発表する機会があると思いますが、このため本誌は爾来五・六月合併号七・八月合併号そして今度は九・十・十一・十二の四ヶ月合併号を発行するといふ、誠に申訳けない仕儀となつたわけであります。

月分の誌代として計算し、九・十・十一・十二月合併号は、頁数も非常に超過していますので、二ヶ月分の誌代として計算させて頂きます。従つて誌代納入の読者には、四ヶ月分購読期間を延長いたしますので、この点おふくみ下さいますよう。

残念ながら新年号は年末に出することは出来ませんでしたが、醒悟園僧堂涌出のため蠟月の本妙律師御命日である十二月十七日、鷲峰一期生の沢田覚象師が京都福知山より来庵し、こゝに僧堂六名を数えるに至りましたので、編集体制を建て直し、新年号よりは定期的に発行出来ると存じます。一層の御支援をお願いする

次第であります。

例月通り四十八頁でありましたので、一

編集後記

鷲峰九・十二合併号
昭和四十年 通卷 第三卷 第七号
大正四年十二月一日 発行

定価 五十円 送料 十円

昭和四十年十一月二十日 印刷
大正四年十二月一日 発行

編集兼发行人

山梨県身延町波木井 醒悟園本妙庵

日高白象

印刷所 山梨県身延町梅平

藤田印刷所

発行事務所

山梨県身延町波木井三区四一二五

鷲峰会

振替(甲府)二〇九三番

誌代	半年分	三六〇円
一年分	七二〇円	(送料共)
一年分	三〇〇〇円	(分納可)

★年の暮れといえば一年の総決算。そこで本誌も過去一年間を振りかえつてみれば、創刊以来三年目という大切な年なのに、四月号以降は合併号ばかりで、年内に新年号を発行することも出来ずにつつてしまつた。申訳けないやら不甲斐ないやら……★然しこれも本妙庵に陸続と参り来る学生僧を養成する体制を整えたのであつたのでやむを得ない★そこで今月号は連載物はともかくとして過去一ヶ年に、掲載もれしていた記事を中心に編集してみたが「日蓮聖人の足跡をたどる身延池上間行脚紀行」も期日の接迫のため印刷する暇がなくなつてしまつた。★蓋しこの紀行文は、弘安五年大聖人が身延山から池上へ赴かれたコースや道中の遺跡を、出来る限り明かにしようとしたものであるだけに、大聖人の伝記中、その晩年の埋もれていた史実を開発するのに貢献するところ少なからずあるため、敢て次号に掲載し、大聖人伝記研究に資したいと思ふ★なお合併号の誌代は六十三頁に発表した通りである★では読者皆様、よいお正月をお迎え下さいますよう…。